
赤い月夜の館

琶苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い月夜の館

【Nコード】

N2812T

【作者名】

琶苑

【あらすじ】

事故で死んでしまった緑木レオン。彼は死なないために偶然、居合わせた真祖の吸血鬼ルイン・フェレストのおかげで吸血鬼となり死なずにすんだ。

ルインの屋敷で使用人として住み込みで働くレオンの前に現れた魔界の暗殺者。

その暗殺者に殺されかけたレオンは性格が豹変し、シオンとなった。

次々と襲いかかる魔界の刺客たち。
果たしてレオンは生き延びることができるか？

第1話 魔界からの暗殺者

ゲームや映画なんかでよく吸血鬼やゾンビ、狼男は出てくる。それは架空の化け物であって現実には存在することはないと言われている。

実際にそこら辺にいる人に

「吸血鬼やゾンビは存在しますか？」

と質問すると、殆どの人は、質問した人を変な目で見て、

「いない」

と答える。

誰も真実の“答え”は知らないというのに……。

だけど、俺は違う。

その“答え”は知っている。

答えは「いる」だ。

何故なら、俺自身が“吸血鬼”だから。

「おい、いつまでボーツとしているつもりだ。さっさと働け」

そして、俺に偉そうに命令しているこの黒髪、赤眼の男こそ、俺を吸血鬼にした張本人、【ルイン・フェレスト】だ。

そもそも、俺が吸血鬼になったのは1ヶ月前の事故だった。

その日の夜、俺は父と母と出かけていた。

人通りの少ない暗い夜道のせいかな、運転手の不注意か、詳しいことは分からない。

俺たちはトラックに引かれた。

父と母は即死だった。

けれど、俺はまだ生きていた。

けれど、すぐに死ぬ。

自分の体のことだから、すぐに分かる。

その時だった。俺と彼が出会ったのは……。

彼は俺に言った。

「生きたいか？」

俺は生きたかった。まだ、死にたくなかった。だから、力を振り絞って頷いた。

「わかった。生かしてやる。ただし、人間としての“生”ではないがな……」

こうして俺は吸血鬼になった。

収入がなくなった俺は住んでいたアパートを出て、住み込みでレオ様の屋敷で働くこととなった。
ちなみに時給は700円である。

吸血鬼っていうのは日の光や十字架に弱いイメージがあるが、そんなものは人が勝手に決めつけただけにすぎない。
実際は十字架やニンニクは平気だし、太陽の光は……人間だったころに比べれば苦手になったが、死ぬことはない。
だから、昼間は学校に行っても何も問題はない。

「レオンさん。客間の掃除は終わりましたか？」

「終わりました」

この執事服を着た優しそうな茶髪の男性は【グレイ】。

ルイン様の使い魔らしい。

「ちよっと、グレイ！レオン！話す暇があったら、仕事してよ！」

この茶髪ストレートのメイド服を着ている女性は、ルイン様の第2の使い魔の【ルリ】。

俺を含めて、この屋敷の掃除などの雑用は3人でやっている。

「ただでさえ、働き手が少ないんだから。ご主人様ももう少し、使い魔か自分のブラッドを増やせばいいのに……」

「仕方ないですよ。ルイン様は自分が気に入った者しか、配下にしませんから」

自分の主人に文句を言うルリをグレイはなだめていた。

ちなみに“ブラッド”ってのは、真祖の吸血鬼に吸血鬼にされた吸血鬼……つまり俺のことだ。

「ご主人様は変わってるからねえ。それを考えると、何であんたがブラッドにされたか不思議だわ」

ルリが俺を見て言う。

そんなことは俺にだって分からない。

ルイン様の気まぐれか。はたまた偶然に事故の現場に居合わせたための同情か。

理由はどうあれ、最終的に吸血鬼になることを決めたのは俺自身だ。

「知らないよ。ルイン様の気まぐれじゃないのか？それより、はやく掃除を終わらせよう。ルリは食事の準備もしないといけないだろ？」

「それもそうね。別の仕事もあるわけだし、早く終わらせましょ」

俺たちが再び自分の仕事に戻ろうとした時、玄関の扉からコンコンとノックする音が聞こえた。

グレイが客を出迎えようと、扉を開けた途端……。

「ハロー！ルイン、ご飯食べにきつたよーん！」

明るい声が唐突に屋敷中に響いた。

橙色の長髪の男が来訪してきた。

グレイは笑っていたけど、ルリは溜め息をついた。

俺は初めて見る人だから事情を飲み込めない。呆然と客を見ながら、客が誰なのか傍にいたルリに聞くことにした。

「あの人、誰だ？」

「あの方はフレイル・ボルケイル公爵。真祖の吸血鬼で、ご主人様の友人よ。

いきなりご飯を食べに来るから、食料を仕入れないといけないのよ。前もって言うてくれれば人数分を準備できるのに……」

ルリはやれやれといった感じで台所に向かっていった。

グレイはフレイルさんをルイン様の寝室に案内するみたいだ。ということは、俺が1人で掃除か。
やっぱり働き手はもっと増やして欲しい。

……フレイルさん、俺を見て笑顔で手を振ってる……。
とりあえず、お辞儀しとくか。
さーて、仕事仕事。

グレイは来訪者であるフレイルを連れ、自分の主の寝室の扉をノックした。

中から「入れ」という声が聞こえ、グレイが扉を開ける。

「失礼します。フレイル様がいらっしゃいました」

「なに？」

「ルインー！ひっさしぶりー！会いたかったよ！」

ルインは仕事机に座っていた。

満面の笑みのフレイルに対して、ルインは笑み一つこぼさず溜め息をついた。

フレイルは部屋にあるソファに腰を下ろした。

「……また食事を食べにきたのか？」

「それもあるけど、今回はそれだけじゃないんだ」

「話でもしに来たのか？……いいだろう。食事の準備が整うまで付き合ってやる」

ルインは扉の前に立っているグレイを見た。

「下がっていいぞ」

「失礼します」

グレイは一礼をして、ルインの寝室を出た。

ルインは自分の仕事机からフレイルと向かい合うようにソファに座った。

「話とはなんだ？」

「魔界で反乱が起きたよ」

「ほう……」

「あれ？あんまり驚かないんだ」

「魔界で何かが起こるたびに驚いていたら、キリがないだろう」

魔界では、闇の者たちが他者を殺したりしていることが少なくない。それは、魔王も例外ではなく、魔王は命を狙われているために反乱が起きたくらいでは驚く必要もない。

「反乱を起こしたのはどこのどいつだ？」

「デイルスター侯爵だよ」

「あのご老人か。魔王に従うふりをし、隙あらば殺そうとしていたわけか」

「デイルスター侯爵には何人か他の貴族たちも味方しているみたい

だよ。

それに、魔王側に属してる僕たちも殺しに来るかもね」

「来るならば、返り討ちにするまでだ。俺の敷地に土足で侵入してただで済ませるつもりはない」

「さすが、ルインだね。話は変わるけど……」

ルインはめんどくさそうにしながらも、フレイルの話を聞くつもりだった。

「いつの間に、ブラッドをつくってたのさ？あの黒髪の少年はブラッドだろ？」

「ひと月前にレオンを偶然、拾っただけだ」

「珍しいよね。君が自分のブラッドをつくるなんて」

「ただの気まぐれだ」

2人が会話をしていると、コンコンと寝室の扉がノックされた。ルインが「入れ」と言うと、扉が開き、ルリが「失礼します」と言っ

「お食事の用意が出来ました」

「待ってたよ！早く移動しようよ！」

フレイルは嬉しそうにし、立ち上がると一目散に食事をするための部屋へ移動した。

ルインはため息をつくど、立ち上がり部屋を移動する。

0時。

フレイルは屋敷を出て行った。

出て行く時に「また来るよ」って言ってた。

「レオン」

「何？」

レオンが食器を片付けていると、 그레이が話かけてきた。

「今日はもう休んでいいですよ。明日も学校があるのでしょ？」

「じゃあ、この食器を片付けてからでいいか？」

「はい」

俺は食器を手にとろうとしたときだった。
突然、部屋の窓ガラスが激しく割れた。

「な、なんだ！？」

窓から4体の狼の姿をした奴が二足歩行をして入ってきた。

「（なんだ？狼男か？）」「 그레이の目つきが鋭くなる。
騒ぎを聞きつけ、ルリもやってきた。

ルリも最初は驚いていたけど、すぐに 그레이同様、目つきが鋭くなった。

「ここはルイン・フェレスト様の屋敷よ。立ち去りなさい」

「立ち去るわけにはいかぬ。我々はルイン・フェレスト公爵の命を
いただきに参ったのだからな」

4体のうちのリーダーと思われる狼男が自分たちの目的を明かした。

レオンはこのことをルイン様に知らせるため、部屋を出ようとした
が、そんなレオンの考えを察知したのか、1人がレオンの前に立ち

ふさがった。

「レオン！」

グレイとルリが同時にレオンの名を叫び、レオンを助けようとしたが、2体の狼男にそれぞれ立ちふさがれて助けにいけなかった。

「逃がさねえぜ！」

狼男はレオンを掴み、窓から放り投げた。

「うわっ！」

レオンは地面に強く激突した。

吸血鬼になったおかげで、人間時より体は丈夫になったが、痛いものは痛い。

「てめー、よええなあ」

レオンが立ち上がるまえに目の前にはレオンを投げ飛ばした狼男がいた。

「まあ、いい。お前を殺して他の奴らで遊んでやるか」

「俺の人生、これで終わりかよ……」

狼男は腕を振り上げ、そして下ろした。

「!？」

しかし、その腕はいとも簡単にレオンに掴まれ、今度は逆に狼男が投げられてしまった。

狼男は空中でひねり、見事に着地する。

「なんだよ。てめー、本当は戦えるんじゃないかよ」

「俺は戦えるさ」

レオンは先ほどとは違う雰囲気を漂わせていた。

レオンが顔を上げると、さっきまでは穏やかな緑色だった瞳が妖しい紫色に変化していた。

護身用に持ち歩いていたのか、懐からナイフを取り出し、刃をむき出した。

最初に動き出したのは狼男だった。

人間では有り得ない速さだった。

レオンの首に噛みつくとした。

「ガッ！」

しかし、血が吹きでたのはレオンではなく、狼男のほうだった。
狼男は口からナイフで貫かれていた。

「流石はウエアウルフだ。見事な動きの速さとパワーだ。下級悪魔が下手に手を出せば、返り討ちにあうな」

「テメエ……何者だ？ただのブラッドじゃ……ねえな」

「何者か、か」

レオンはナイフを抜くと、今度は心臓を貫いた。心臓を貫き、ナイフを抜くと狼男は……いや、ウエアウルフは倒れた。

「魔族を殺したのは久しぶりだな。

だが、俺の今回の標的はお前らじゃあない」

レオンはナイフから血を払うと、屋敷の中へ戻っていった。

ルインの寝室には、ルインの他にリーダーと思われたウエアウルフがいた。

そのウエアウルフはルインを殺しに来たのだった。

「フェレスト郷、その命をいただく」

自分の命が狙われているというのに、ルインはあわてる様子もなく、

ただソファに座り笑っていた。

「落ち着いていらっしやるのですね……」

「魔界で反乱が起きたことはフレイルから聞いているからな」

ウェアウルフは「そうですか……」と言うと、それ以上は何も語らなかった。

「お前はデイルスター郷の誇り高き戦士、ガイル・ルーであろう。貴様がこんな暗殺まがいのことをしでかすとは思わなかったぞ」

ガイルと呼ばれたウェアウルフは、ルインにそう言われ、顔を引きつった。

「私もこのようなことはしたくはありませんでした。ですが、デイルスター様のご命令なのです……」

「貴様は少々、頭が固いところが難点だな。したくないならばその命令を拒否すればよろう」

「……話は終わりです。そろそろ貴殿の命を頂戴する」

ガイルがルインを睨みつけた。
ルインも立ち上がり、どこからか剣を取り出し手にした。

「ガイル…誇り高きウェアウルフよ…くるがいい」

ガイルは一步踏み出した。

しかし、それ以上は足を動かさなかった。

「どうした…！？」

ガイルが突然、倒れたのだ。

ガイルの背後にはレオンが立っている。

ナイフについている血とガイルの心臓部の背中から出ている血をみる限り、レオンがガイルを刺したことがすぐにわかった。

「ウェアウルフ、その吸血鬼を殺すのは俺の役目だ。
いや、もう聞こえていないか」

レオンは倒れたガイルに見下ろしながら言ったが、ガイルはピクリとも動くことはなかった。

レオンは視線をガイルからルインに向けた。
そして、一目散にルインの目の前に移動してルインの首もとにナイフを向けた。

自分の命の危機だというのに、ルインは焦る様子がなかった。それどころか顔が笑っている。

「久しぶりだな。ルイン・フェレスト」

「そうだな。レオン……いや、今はシオンと呼んだ方がよさそうだな。今回の軀よりしろは緑木レオンか？」

「まあな。俺が軀にできる奴は限られているからな」

「最後に会ったのは150年前だったか？」

「ああ、そうだ。貴様を殺すまで、俺は眠るつもりはない」

さつきまで、シオンも笑っていたがその笑みが一瞬にして消えた。

「それよりも貴様、俺がこの軀に宿っていることを知っていてなお、レオンを吸血鬼にして生かしたな」

「お前に会いたくなつてな。だが、お前がなかなか出てこないから間違えたのかと思ったぞ」

「隙あらば殺そうとしていたからな。だが、貴様に隙がなかった」

「今回は混乱に乗じて出てきたわけか……」

シオンは妖しく笑うと、ナイフを持つ手に力を入れた。

「1000年、俺は貴様を追った。そしてようやく殺せる。
長い追いかけてもここまでだ…。死ね、ルイン・フェレスト」

「いいえ、死ぬのはあなたです」

그레이の声が突然シオンの背後から聞こえた。
シオンの後ろには 그레이とルリが立っていて、 그레이の手には剣が
あった。
その剣の矛先は勿論、シオンだ。

「そつえば、お前もいたな。
あのウェアウルフ共、時間稼ぎもできないのか…」

「残念だったな、シオン」

「まあいい…。俺もそろそろ限界、だ…」

シオンは意識が薄れてゆき、ナイフから手を放すとルインに倒れて
いった。

倒れたシオンをルインは抱きとめた。

不死者へゾンビ

目の前に見えるのは、最近ようやく見慣れた天井。

俺は重たい体を起こした。

「俺の部屋……。いつの間に寝たんだ？」

昨日……。いや、最近は0時には普通に起きてるし、正しくは今日か。
今日、寝る前の出来事を思い返す。

！！！！

そえだ！狼男が屋敷に現れて、俺は殺されかけて、それから……。？
それから……。どうした？

………

ダメだ。そのあとが全然、思い出せない。
キィ……。扉が開く音がした。

「目が覚めましたか？」

「グレイ…」

グレイが俺の部屋に入ってきた。

「気分はいかがですか？」

「大丈夫…。それより、昨日の狼男たちはどうしたんだ！？俺、あいつらにやられたんじゃないか…！」

「昨日の刺客たちは狼男ではなく、ウェアウルフです」

ウェアウルフ？狼男とはどう違うんだ？

「狼男は満月を見たとき以外は人間の姿ですよ？ですが、ウェアウルフは満月がなくてもあのような姿になれるんですよ」

俺の思考を察したのか、グレイはウェアウルフと狼男の違いを説明してくれた。

すると、グレイは俺の目の前に時計を差し出した。

時計なんて俺に見せてどうする……って！

「学校に遅れる！急いで着替えないと！！」

「着替えたら食事室へ……」

「時間がないからいい!!」

メシなんて食ってる暇なんかない!

俺は急いで着替えるとそのまま屋敷を飛び出していった。

朝からあわただしく屋敷を出たレオンを見たルリは呆れていた。

「朝からあわただしいわね。深夜でのことをまったく覚えてないみたいね」

“みたい”ではなく、本当に覚えてなどいない」

朝には聞くことのない声。

その声にルリは驚き、声がした方向を振り向く。

ルリとは逆にグレイは驚くことはなく、ニコニコと微笑んでいた。

「朝に起きるなんて珍しいですね、ルイン様」

「忘れていたことがあつて……。レオンが行ってしまったのならかまわないが」

「レオンになにかご用があつたのですか?」

「あいつ、吸血鬼になってから一度も吸血をしていなくな」

「ええ!？」

さすがにこれにはグレイも驚いたようで、表情に出ていた。

吸血鬼ならば、血を飲まなければ生きていけない。

吸血鬼が血を飲まないでいると、いずれは死んでしまう。

それ以前に血を飲まないでいるなんて我慢できないはずだ。

「学校は人間がたくさんいるからまずいではありませんか？人間の血を吸いつくすかもしれませんよ？」

「といかなんで血を与えなかったのですか？」

「俺は与えようとしたが、レオンがそれを拒んだんだ。自分が吸血鬼だということをまだ理解できないのだろうな」

「レオンに血を与えにいきますか？」

「昨日まで大丈夫だったんだ。今日も大丈夫だろ」

ルインはあくびをして寝室に戻っていった。どうやら、また眠るようだ。

グレイとルリは少しレオンを心配していた様子だったが、自分の仕

事に戻った。

……今日はいつもより気分がすぐれない。
いや、日増しに気分が悪くなってきている。

血を飲んでいないからか？

でも、血を飲むことには抵抗がある。俺には血を飲むことは……。

「——オン！レオン！」

「ん？サクヨか……。どうした？」

「どうしたはこっちのセリフ！レオン、顔色悪いけど大丈夫？」

俺に話しかけてきているこいつは幼馴染の“おいらん櫟サクヨ”。
俺が吸血鬼だということは知らない。

「ああ、だいじょう……」

「緑木君！顔色、悪いんだって！？大丈夫？」

突然、クラス中の女子たちが俺の机の前に現れた。

心配してくれるのは嬉しいが、うるさい。

女子たちは毎回毎回、俺の前に現れて騒がしくする。

「大丈夫だから、気にしなくてもいい」

「でも、本当に顔色悪そうよ。保健室に行った方がいいんじゃないの？」

「じゃあ、あたし緑木君の付き添いに立候補！」

「ずっーい！あたしが緑木君と行く！」

女子たちが騒ぐ……。うるさい……。

ただでさえ、気分が悪いっていうのにうるさくされるとさらに気分が悪くなる。

……人間から血のにおいがする……。

あの女たちの血はうまいのだろうか？まずいのだろうか？

「！？」

俺は何を考えていたんだ！？
血を呑もうなんて考えていたのか？
ここは人が多すぎる。

「レオン？本当に大丈夫なの？保健室行った方がいいんじゃないの？」

「その必要はない。サクヨ、早退するから先生の言うておいてくれ」

「うん、わかった……」

レオンは教室を出て、そして学校に背を向けて歩きだした。
しかし、レオンは屋敷に帰る途中でさらに気分が悪くなったのか、
膝をついた。

「くそっ！血を飲まないだけでここまで弱るなんて……。吸血鬼の
体も不便だな」

「あの……」

「ん？」

レオンの目の前にいつの間にか赤い髪の女が立っていた。
ストリートだが、手入れをしっかりとっていないようで、少しボサボ
サだ。

女性なのになぜか男物の和服を着ている。

「大丈夫ですか？気分が悪いんですか？」

「ああ、大丈夫……。少し休めば気分がよくなると思う」

「お水、飲みますか？」

女は冷たい水が入っているペットボトルをレオンに手渡した。
レオンは水を受け取り、飲むと先ほどより顔色が少しよくなったようだ。

「ありがとう。少し、気分がよくなったよ」

「それ、あげます。それじゃあ、私は行くところがあるので失礼しますね」

女はそう言いつと、立ち去ってしまった。

「……あの女、見たところ俺とあんまり年齢変わらないよな？学校に行っていないのか？」

しばらく、休んでいると歩けるようになったのでレオンは立ち上がり屋敷に向かって歩いていった。

その日の夜。

俺はルイン様に呼ばれ、今その人の寝室にいる。
用件はなんとなく理解できる。

「血を呑め、レオン」

「……」

「呑まなければ、お前死ぬぞ。何のために吸血鬼にまでなって生きたんだ？」

そんなことは分かってる。死にたくなかったから吸血鬼になったんだ。

でも、血を飲むなんてやっぱり……。

ん？なんだか部屋の外が騒がしい。
また、客でも来たのか？

でも、この騒がしさは昨日のあいつらと似てる気がする。

「まさか……」

おそろおそろ扉を開けてみると、やっぱり予想してた通りだった。グレイとルリが昨日とは違う別の化け物と戦ってる…。

「あいつら、何だ？今度は牛男か？」

「今度の刺客はビーストだな。牛男でもあながち間違いではない」

「ビースト……」

「力は強いが、知能はほとんどない中級魔族だ」

「じゃあ、あんまり強くないんですね」

「あの数ならば、グレイとルリだけでも大丈夫……」

ルインが「大丈夫」と言おうとした時だった。

突然、外から銃声が響き、玄関の扉を突き抜けて銃弾が全てのビーストに当たった。

ビーストたちは痛そうではあるが、倒れることなく攻撃された外へと通じる扉へと向かっていく。

しかし、ビーストが外へと出るまえに、銃弾を撃ったと思われる人物が先に屋敷の中へと入ってきてビーストたちを銃で撃ちまくった。さすがに何発も当たるとビーストも倒れ、それからピクリとも動かなくなった。

「あれ？あいつ……」

見覚えが……？

レオンが突然現れた人物に見覚えがあった。

ボサボサの赤髪、男物の着物…。

あいつ！俺が道で苦しめてたときに水をくれた女、だよな。どうしてここに？

女は無言のまま、銃口をグレイとルリに向けるとそのまま2人に向かってうつた。

「！？」

なんだ！？あの女も魔界からの刺客ってやつなのか？

女の攻撃には隙がなく、グレイとルリは銃弾を避けるのに精一杯のようだ。

しかし、そんな状態が長続きするわけもなく、やがて弾切れとなった。

すかさず銃の弾を補充しようとするが、せつかくできた隙を見逃すグレイとルリではなかった。

ルリはナイフを女の持つ銃に投げつけ、銃をはじめた。

女は銃をはじめ、手から離れてしまった。

「今よ、グレイ！」

「分かりました！」

ルリの合図でグレイは一気に女に詰め寄り、剣で女に斬りかかろうとした。

「これで終わりです！」

「!？」

グレイの持つ剣は女の脇腹にささった。
女は致命傷を負った。
グレイそう思った。

しかし、女は顔を上げてグレイを見た。

「なっ！？致命傷を受けた筈！動けるわけが…！」

女は隠し持っていた短刀を抜くと、グレイの右の胸を短刀で刺した。
グレイは女とすれ違うように倒れていった。

「グレイ！」

「ルリ、来たぞ」

「え？」

ルインにそう言われ、ルリは自分の目の前に女がいたことに気付いた。

「いつの間に！？」

ルリは咄嗟に手にしていたナイフで女を攻撃したが、女はいとも簡

単に短刀でルリの攻撃を防ぐと、右足でルリの腹部を攻撃した。

「カハッ！」

ルリはその場で膝をついてうずくまってしまった。

「あとで始末してやるから、そこで待っているんだな」

女は落ちた銃を拾うと、ルインを睨みつけ、ルインの所に移動をし始めた。

「グレイ…ルリ…。なんなんだよ？あの女…」

レオンとルインの前にやってきた女は銃口をルインに向けた。

すると、レオンはルインを庇うようにルインの前に立つ。

「お前は昼間の…。そこをどけ」

「嫌だ」

「できれば人間は殺したくない」

「俺はもう人間じゃない!!」

その言葉を聞いた女は、目を丸くし驚いていた。

「だが、お前からは血の匂いが……」

「血の匂い？」

女は言いかけた言葉を飲み込む。

「お前が人間でないとすれば、私はお前を殺すだけだ。だが、今はその真租の吸血鬼からだ」

「ルイン様を殺すなら俺を殺してからしろ」

「……殺して欲しいならお前から殺してやってもいいぞ。あそこで倒れている奴らと一緒にあとでまとめて殺そうと思ったんだが……」

女はレオンに近付き、短刀で刺そうとした。

女の持つ短刀がレオンの心臓を目の前にし刺そうとした時、短刀の動きが突然ピタリと止まったのだ。

なぜなら、短刀を持つ女の腕をレオンが掴んでいたからだ。

「!？」

「また現れたか、シオン」

「^{レオン} 軀に死なれたら困るからな」

シオンが女の腕を掴んだのだった。

「今回はどんな奴がレオンを殺そうとしたんだ？」

シオンは口元を釣り上げながら女の顔を見た。

女は空いている方の手で銃も構え、シオンをうつ。

咄嗟に銃に気付いたシオンは女から手を放し、銃弾をよけた。
シオンの後ろにいたルインも流れ弾をよける。

女は続けてうつが、全てシオンによけられてすぐに弾切れになった。

女は銃を投げ捨てると、短刀でシオンを攻撃する。

シオンはナイフで女の攻撃を全て防いでいる。

「化け物でもない女を傷つけるのは気が進まないが……」

シオンはそう言って、女の心臓部分にナイフを突き刺した。

「^{レオン} 軀を殺そうとするなら話は別だ」

突き刺したナイフを抜きとると、支えを失った女は床に倒れた。床に敷いてあるじゅうたんは女の血で染まってゆく。

シオンはナイフについた血を払うと、ルインを向きナイフを向けた。

「今回は邪魔も入らない。ゆっくりお前を殺すことができるな」

「……いや、邪魔する者はまだいるぞ」

「何言ってるんだ？お前の使い魔は下で倒れてしばらくは動けない。さっきの女も見ての通り、ナイフを心臓に突き刺した。生きてるわけがないぜ」

「そう思うなら後ろを見てみる」

シオンは半信半疑でルインに言われた通り、後ろを振り向いた。後ろを振り向いた瞬間、シオンは目を疑い驚いた。

「なん……だと……」

心臓にナイフを突き刺され、死んだと思われた女がゆっくりと立ち

上がったのだ。

仕留めそこなったのかと思い、シオンが女の心臓部分を見たが女の心臓部分からは血で汚れた服がにじみ出ていた。

「なんで立ってるんだ？人間ならとくに死んで……いや、人間でなくても心臓を突き刺されて生きてる奴がいるわけない……」

「シオン、まだ気づいていないのか？殺しても死なない存在に」

ルインにそう言われ、シオンは顎に手を添えて考えた。

「殺しても死なない存在……。まさか、お前^{ソンビ}不死者か！？」

「そうだ……私は不死者だ」

女は自分が不死者だということをシオンにこたえと、唇をかみしめた。

女が不死者だと分かったと、シオンはあきらめたように両手をあげた。

「不死者が相手ならさすがの俺も諦めざるをえないな」

「今のお前はどっちだ？」

「？」

女にそう言われ、シオンは首をかしげた。

「その吸血鬼を護った方か？それとも殺そうとしている方か？」

そういうことかとシオンは苦笑する。

「今は後者のほうだ。だけど、この体の持ち主はレオン……この性悪吸血鬼を護った方だ」

「お前はその体を借りているわけだから、表に出てきたのか」

「俺はルインを殺すためによりしろ軀が必要だったからな。この体に死なれちや困る」

「待て。その吸血鬼を殺すのは私の役目だ」

「吸血鬼を殺すなら他の奴にしる。俺は吸血鬼じゃなく、こいつを殺したいんだ」

いつの間にかどっちがルインを殺すかでもめていた。
自分の目の前でそんな話をされているルインはあまりいい気はしないだろう。

しかし、ルインはそんな言い争いが面白いのか笑っていた。

ルインが笑っている間も二人は言い争いを続けている。

「だいたい、お前はこいつに会ったことでもあんのか？」

「ない。今日が初めてだ」

「だったら、なんでこいつを殺そうとすんだよ？」

「私が人間に戻るには一人でも多くの化け物を殺さなければならないんだ」

女が言ったことを聞いて、ルインは笑っていた顔を一瞬で真剣なものにし、言い争う二人の間に割って入った。

「“人間に戻る”とはどういうことだ？」

「私を不死者にした死霊術師が『1万の魔族を殺せば人間に戻せる』って言ったんだ」

「確かに、死霊術師なら1万の魔族の命を奪った不死者を人間に戻すことは可能だ。……しかし、死霊術師が現代に存在していたとは

……」

「そういうわけだから、私を人間に戻すために殺される」

そう言ってルインに短刀を向ける女に対し、納得のできないシオン

は再び文句を言う。
そして二人はまた言い争いを始めた。

「フツ……クツクツクツ……」

突然、ルインが笑い出したことにギョツとしたシオンと女は言い争いをやめ、ルインを見た。
当然ではあるが二人は驚いている。

「長生きしすぎてついに頭がおかしくなったのか？それは大変だ、すぐに俺に殺される」

「いや、だから私が殺す」

「女、お前の名は？」

女はいきなりルインに名前を聞かれ、驚いたが深呼吸をして心を落ち着かせると、ルインをまっすぐ見て自分の名前を口にする。

「キキヨウ。水無月キキヨウ」

「なら、キキヨウ。俺と契約を結べ」

「！？」

ルインに『契約を結べ』と言われ、どういふことが分からないキキヨウとそれを聞いていたシオンは首をかしげる。
そんな二人に説明をするようにルインは話を続ける。

「俺は今、魔界からの刺客に命を狙われている。そこでだ、ここで住み込みで働き、やってくる刺客を殺せ」

そこまで言われ、シオンもキキヨウも理解できたようだ。

「その代わり、私はお前を殺さないでいると」

「その通りだ」

ルインからの提案にキキヨウは短刀を持ち上げていた手をおろし、提案を受け入れるか否か答えを出すために考え始めた。
しかしすぐに顔を上げ、考える時間はごくわずかだった。

「その契約、結ぼう。私にとっては悪い話……いや、むしろ良い話のようだ」

「契約成立だな」

キキヨウは契約が成立されたのが分かると、むき出しにしていた刃

を隠し、短刀と銃を仕舞った。

キキョウがもうルインに敵対心を持っていないことが分かると、シオンはナイフを強く握りしめルインに向けた。

「これでゆっくりお前を殺せるな、ルイン」

「殺す殺すとさっきから言っているが……」

キキョウがシオンに話かけてきた。

シオンはナイフをルインに向けたまま目線だけをキキョウに向け、話を聞く。

「この真祖の吸血鬼はお前の主人吸血鬼マスターヴァンパイアだろう？ 殺してしまったはその体はもたないぞ」

キキョウの話に興味を持ったのか、シオンはナイフを持っていた手を降ろし体ごとキキョウの方を向いた。

「どういうことだ？」

「ブラッドは主人吸血鬼の血がなくては生きてはいけない」

「なに！？」

その話を信じられなかったシオンはバツとルインに答えを求めるようにルインを見た。

「残念ながらキキョウの言ったことは真実だ」

“残念ながら”と言っていたが、ルインの表情は笑顔だった。

「つまり俺はこいつが死なないようにこいつを護らなければならな
いってことか？」

「そういうことになる」

「千年間、こいつを殺すために軀を乗り換えてきたつてのに……」

「安心しろ、シオン。俺の血は半年に1回程度飲めば問題はない」

「お前の血を飲んで生きることが……！」

シオンは突然の立ちくらみに襲われた。

自分の力で立っているのもつらく、手すりに手をかけてなんとか立つ。

「なんだ……？前も気分が悪かったが、今回はすごく気分が悪い……。それにいつもより喉が渴く……」

「本来ならば1週間に一度飲まなければならない血をひと月も飲まないからだろうな」

ルインが何か言ってるが、今の俺には耳に入らない。

目の前で血のついた服を着ているキキヨウから目が離せない。

気がついたときには、無意識のうちにキキヨウに抱きつき、そして彼女の首筋から牙で噛みつき、血を……飲んでいた……。

なんだ……？ 喉が潤う……。血がうまい……。

キキヨウは血がなくなっていくせいか、体中から力が抜けていき立つこともままならなくなっていた。

しかし、そんなキキヨウをシオンが抱きつき支えていたため、倒れることはなかった。

そんな様子を見ていたルインは唇を釣り上げて楽しそうに見ていた。

「!?!」

シオンは突然、キキヨウから手をはなす。
シオンから解放されたことでキキヨウは支えを失い、床にぺタリと
座り込んだ。

……俺は何を……？
これじゃあ、ルインの奴と同じ吸血鬼だ……！

キキヨウは虚ろな目でシオンを見て、そして力ない声を出した。

「私が……不死者……でなか……たら……人一人……死なせる……
……勢いだっただ……ぞ……」

キキヨウはそうシオンに言って、床に倒れこみ気絶した。
ルインはそんなキキヨウを横抱きにしてから、シオンを見た。

「お前とレオンはすでに一心同体だ。レオンが吸血鬼になったのなら、その軀をつかっているお前も吸血鬼。本能には逆らえない」

そう言うと、キキヨウを抱えてその場をあとにした。

その場にただ一人残ったシオンは床についたキキョウの血を見た。

「……………今日、この軀を使っている時間も終わり……だな……」

そう言って、シオン……………いやレオンは床に倒れこんだ……………。

赤い服の悪魔払い〈エクソシスト〉

見慣れた天井…。

「まただ……」

また、昨晚の記憶が途中からない。

あの女に殺されそうになったところまでは覚えてる。
そこからは記憶がない。

女の攻撃に当たって気絶したんだろうか？
でも、特に体が痛いわけじゃない。
吸血鬼だから治りが早いんだろうか？

……そうだ！

ルイン様は大丈夫なのか？グレイは？ルリは？
あの女はどうなったんだ？

レオンは起きあがると昨日から着続けていた使用人服のまま部屋を出た。

レオンが強く扉を開けたため、扉を開ける音は屋敷中に響く。

「どうしたんですか？」

驚いた表情でグレイはレオンを見ていた。

「グレイ！」

レオンはグレイを見て安心して自然と笑みがこぼれた。

「無事だったんだな。ケガは大丈夫なのか？」

「魔族は回復力は人間の倍以上ありますからね。それに、ケガはそれほどひどくはありませんでした」

「そっか…」

ルイン様とルリは？」

「ルイン様は無傷です。ルリなら今部屋に…」

「ちょっと！大人しくしなさいよ！」

うわっ！ビックリしたあ。

ルリの部屋からルリの元気な声が聞こえた。

思ったより元気みたいだし、心配して損した感じだな…。

つか、何を騒いでるんだ？

「朝からうるさいぞ」

「ルイン様、申し訳ありません」

ルリの声で目覚めたのか、ルインがまだ眠たそうな顔をして自室から姿を見せた。

ルインはレオンがいることに気付くとレオンに近寄りジーツと顔を見た。

「あの…？」

「顔色は良さそうだな。体調はどうだ？」

「体調は悪くありませんが？」

ルイン様に聞かれて初めて気付いた。
そういえば昨日より体調が全然いい。
むしろ、健康っぽい。

なんでだ？

レオンが腕を組んで考えていると、ルリの部屋の扉がバンツと開き、
ルリが誰かを引っ張って部屋を出てきた。

「ご主人様、 그레이、できましたよ！」

「ほう……」

ルリは男性陣3人の前にツインテールの髪形でルリと同じメイド服
を着た女を見せた。

女は少し渋そうな顔をしていた。

「なぜ私がこんな格好を……」

どうやら女はいまの格好が気に入らないらしい。

「これがこの屋敷の制服だもの。仕方ないでしょ」

「なぜ髪形まで…」

「女の子だから少しは身だしなみに気を使いなさい」

「……」

嫌な顔をしている女にグレイは近づいて話かけた。

「似合っていますよ」

「そうなのか？」

「ええ」

「まあ、私のコーディネートがいいからね」

ルリが自慢気に言う。

そんなルリをグレイはただニコニコと見ていた。

女を見てから首を傾げていたレオンはルインに聞くことにした。

「ルイン様、あの女の子は誰ですか？」

「もう忘れたのか？ 昨晚、襲撃してきた女だぞ」

「ええ！？」

そう言われれば顔が同じだ…。

昨日と全然身なりが違うから気づかなかった…って！

「なんで襲ってきた人が普通に屋敷にいるんですか！」

「屋敷の使用人になったからに決まっているだろう」

使用人！？

いやいや、有り得ない。

どうして襲ってきたやつが使用人になるんだ？

「それでは私がお前のために使用人になったみたいな言い方になる」

「何か間違っているのか？」

ルイン様と俺の会話が聞こえたのか女が会話に横入りしてきた。

「私はお前の為ではなく、自分の為にここにいるんだ。
使用人になったのはここに住まわせてもらっているかわりに働くに
すぎない」

下宿料ってやつだな。

まあ、昨晚の格好を見る限り持ち合わせている金があるように思え
ないし……。

あれ？なら、こいつどうやって生活してたんだ？

「お前、レオンだよな？」

「そうだけど？俺に様でもあるのか？」

俺が考えごとをしていると、女が話しかけてきた。
俺の名前は多分、ルイン様にでも聞いたんだろうな。

「いや、ただ確認してみただけだ」

確認？確認って名前の確認か？

「そついえば俺、お前の名前知らないんだけど…」

「名前…？」

名前を聞くと、何でか顎に手を添えて考え始めた。
俺、何か変な質問をしたっけ…？

「そういうことか…」

「何がだよ？」

「なんでもない」

なんで一人で納得してるんだ？
変な女だな。

「名前だったな。」

姓は水無月、名はキキヨウだ」

水無月キキヨウ、か。

「キキヨウって人間、だよな？」

昨晚のグレイたちとの戦いを見た限りだと、使ってたのは普通の銃とかだったし…。

「“元”がつくがな」

元人間？

今は人間じゃないってことか？

「なら、今はなんなんだ？」

「不死者」

「ゾンビ…？」

よくゲームや映画に出てくる死体が動くアレのことかな？

「でも、ゾンビって脳は死んでるから意志とかはないんじゃない？」

「それは腐敗者^{グール}の方だ」

俺の知ってるゾンビと違うことで悩んでいると、ルイン様が教えてくれた。

「グール？」

「ゾンビは不死者と書くが、グールは腐敗者と書く」

不死者と腐敗者？

「不死者は死霊術師によつて肉体から離れた魂を死神につれていかれる前に再び肉体に戻すんだ。元々、肉体は死んでいるから不死者が死ぬことはない」

つまり、死ぬことができない人間って感じが。

「腐敗者は生きている人間が“死徒”の吸血鬼によつて血を吸われると身体や脳が腐敗する。生ける屍というやつだな」

「“死徒”？」

また新しい単語が出てきた。

吸血鬼って真祖とブラッドの他に死徒もあるのかよ。

「吸血鬼には三種類ある。

人間を吸血鬼にすることができる“真祖”。
真祖によつて吸血鬼にされた“ブラッド”。

そして、人間を腐敗者にする“死徒”だ」

真祖に死徒にブラッドか…。
確かルイン様は真祖だよな。

「レオンさん、お話中すみませんが…」

「グレイ、どうしたんだよ？」

「学校に行かないのですか？」

「ああ！」

時間がない！

この屋敷、町外れにあるから遠いんだよ！

制服に着替えて行かないと！

レオンはあわてて自室に行き、制服に着替えて屋敷を出て行った。

慌てて出て行ったレオンを見て、キキョウは何がなんだかよくわかっていない様子だった。

「レオンはなぜ慌てて出て行ったんだ？」

「学校に遅刻しそうだったからでしょ？」

「学校…？」

「勉強を学ぶところですよ」

「なるほど。現代の寺子屋か」

「寺子屋って…。あんた江戸時代の人間じゃあるまいし」

ルリはキキヨウがおかしな言い方をするものだから、笑ってしまっ
た。

그레이も軽く笑ってしまっていた。

「何を言っている。私が生まれたのは、江戸の幕末だぞ」

「え？」

キキヨウの衝撃的なカミングアウトに 그레이やルリだけでなく、ル
インまでもが驚いていた。

「16、7歳にしては落ち着いているとは思ってたけど、まさか1
00年以上生きてるおばあちゃんだったとは思わなかったわ…」

「確かに不死者は歳をとることはありませんが…」

「不死者は成長事態が止まるからな」

“死ぬことがない”ということは、歳をとって死ぬこともない。不死者は不老不死そのものである。

「キキヨウさん」

グレイに名前を呼ばれ、キキヨウは顔をグレイに向けた。

「屋敷の仕事を教えたいのですが、よろしいですか？」

キキヨウは今日から働き始める新参者。仕事の仕方が分からないのは当然なので、教えなければならない。

「わかった。まず、何をすればいい？」

「まずは、屋敷内の掃除からです」

キキヨウはグレイに任せてルリは自分の仕事をするため、台所へ向かった。

ルインは欠伸をして自室へ戻る。どうやら、もう一度眠るようだ。

桜月学園 -

レオンの通う学園である。

なんとか、ギリギリ遅刻せずにすんだレオンは一時間目を終え、教

室で次の授業の準備をしていた。

すると、レオンの所にサクヨが近づき話しかけてきた。

「昨日と比べて随分と顔色がいいわね。体調はよくなったの？」

「まあな」

本当に体調がいいな。
なんでだ？

……俺の記憶の中に吸血した記憶はないし……。

「ところでよ、レオンって前に住んでたアパート出たんだろ？」

前の席から話しかけてきたこの男は、森之宮ユウジ。
中学からの親友だ。

「払う金もないしな」

「なら、今はどうやって生活してんだ？」

「そつえば、私も聞いてないわね」

「住み込みで働いて生活してる」

「へえ。どこで住み込みで生活してんだ？」

「金持ちの屋敷だよ」

「屋敷！？」

嘘はついてないはずだよな？

まさか、「吸血鬼の屋敷で働いてる」なんて言えないし。

ルイン様、魔界じゃあ公爵だって話だし、屋敷も立派だから金持ちだよな？

「ここら辺に屋敷なんてあつたっけ？」

「ここら辺にはないよ。町外れの場所にある」

「金持ちの屋敷かあ。行ってみてえな」

いや、来られるのは非常に困る！

ルイン様や俺が吸血鬼だってバレたらマズいつて！

「屋敷の主人に許可もらわないと中には入れないと思うぞ」

「行きたいけどよ、今は部活が忙しいんだよ」

「私も委員会で忙しいから……」

良かった。

心の底から良かった。

吸血鬼のことがバレるのも困るけど、いつ来るか分からない刺客がいるのに二人を危険な目に合わせずにすむ。

その後、レオンは授業をすべて終え、あっという間に放課後になった。

部活動も委員会も入っていないレオンだが、今日は先生に呼び出され帰るころはすでに夕暮れ時だった。

「今日は遅くなったなあ。まあ、仕事をする時間も減ったしまあいいか」

レオンは屋敷への帰り道を歩いていたが、突然足を止めた。

あそこにいる奴ってもしかして……。

「キキヨウ!？」

「レオンか」

キキヨウは白い生地ワンピースを着てレジ袋を持っていた。

キキヨウを見てレオンは驚いている。

「お前、どうしてここにいるんだよ?」

「この町の地形を覚えるついでに買い出しを頼まれた」

「他には何か買うのか？」

レオンにそう言われ、キキヨウはポケットからメモ用紙を取り出して他を買う物がいないか確認した。

「……他にはない」

「なら一緒に帰ろう」

「……お前は“帰る”というんだな」

「え？」

「あの屋敷はお前にとって帰るべき場所なんだな」

「キキヨウは違うのか？」

「帰る場所は140年前に失っている」

ひやくよんじゅう！？

140年前って…幕末！？

キキヨウってもしかして、見た目よりずっとおばあちゃん？

不死者って歳もとらないのか……。

「どうした？私の実年齢を聞いて驚いたか？」

驚いているレオンを見て微かに笑っているキキョウ。

「驚くよ……。俺と同じ歳くらいだと思ってたし。

キキョウって幕末の生まれなら、やっぱり新選組とか見たことあるのか？」

「……見たことは、ある」

あれ？今一瞬淋しそうな顔した？

まあ、幕末のころってこいつの家族とかいたわけだしな。こいつの友達だっていたわけだし。

いない奴を思い出して淋しいんだろうな。

「……レオン、止まれ」

キキョウがそう言ったのは人の姿がまったく道にさしかかったときだった。

日は完全に落ち、辺りは完全に暗かった。

「どうしたんだ？」

「私たちに何の用だ？」

「いえ、人間に紛れて化け物がいるなあと思ひまして。その駆除に来たんですよ」

二人の背後からした第三者の声。

「なんだろう？」と思いレオンが後ろを振り向くと、赤い帽子と赤いマントを身につけている黒髪の男が笑顔で立っていた。

キキヨウも少し遅れてレオンと同様にその男を見た。

「なんだよ、あんた？それに駆除って…？」

「はじめまして。私は『月神センリ』と申します。短い間ですがよろしく願ひします」

「短い間？」

「ええ。あなた方を始末するんですから、短い間の付き合いでしょう！」

センリはそう言い放つと同時に、何かを二人に投げてきた。

レオンは突然の行動に反応できなかったが、すぐに反応できたキキヨウが体を押してくれたおかげでセンリの投げた物に当たらずにすんだ。

キキヨウはセンリを押したあと、自分自身もよけた。

「一体なんなん……だ……」

レオンはセンリが投げた物を見て顔を青ざめた。

センリが投げたであろう30cmほどの長さの銀でできた針が地面に刺さっていた。

「よけられてしまいましたね。残念です」

「あいつ、なんなんだよ？」

レオンはキキヨウに尋ねると、キキヨウは買い物袋を地面に投げ捨て隠していた短刀を取り出した。

冷や汗を流しながら、レオンの質問に答えた。

「奴はおそらく教会公認の悪魔払い《エクソシスト》だ」

「悪魔払いって……俺達って悪魔なのか？」

「表では悪魔払いと名乗っているが、実際は化け物専門の殺し屋だ」

「化け物って……」

吸血鬼であるレオンと不死者であるキキヨウは完全に当てはまって

いた。

「下がっている。こいつは私が始末する」

レオンにそう告げると同時にキキヨウは短刀を自分の前に突き出し、センリに向かって走り出した。

キキヨウがセンリに向かって走っている間もセンリは針を投げつけていた。

キキヨウはセンリの投げる針をよけたり、はじいたりしている。

そして、キキヨウがセンリとの距離が1歩2歩というところまでつまった。

「これで終わりだ」

「まだですよ」

キキヨウの短刀をセンリは針3本で受け止めた。

「!？」

「あんな細っこい針3本だけで剣を受け止めた？」

遠くから見ていたレオンは驚く。
キキヨウもレオン同様驚いている。

その時、キキヨウに隙ができセンは懐から今までより太い針を取り出した。

「あっ！」

「これで終わりです！」

センはキキヨウの心臓部分にその太い針を刺した。
太い針には血が流れ落ち、キキヨウの着ていた白いワンピースには赤い血が目立った。

「キキヨウ！！！」

レオンがキキヨウの心配をしていたが、その心配とは裏腹にキキヨウはつらそうな顔をしながらも太い針を体から抜きとった。

そして、傷口を抑えながらも目の前にいるセンを睨みつける。

「ん？あなたもしかして……」

センは心臓を貫かれても立っているキキヨウに興味を持っている。

「魔族の弱点である銀で心臓を貫かれても生きている……。あなたは不死者でしたか」

「不死者をどうやって殺す？ 悪魔払い」

「腐敗者ならば殺せるんですが、不死者となると殺せませんね。というわけでこうさせていただきます」

「っ！（早い…）」

キキヨウの目では捕えることのできない素早い動きでキキヨウの短刀を持っていた左手の甲に1本の針を刺した。

「不死者だから死なないが、痛覚は普通にあるのだぞ」

「痛覚はあっても死なないのが不死者です。だから、あなたの動きを封じさせてもらいます」

「動きを……！？」

キキヨウは突然、地面に膝をつきそれからまったく動くことがなかった。

首はなんとか動かせたので、顔をあげ睨みつける。

「何をした？」

「その針には麻痺薬がぬられていましてね。しびれて動けないですよ？」

その間にそちらの化け物を始末させていただきましょう」

センリはそう言って今まで戦いを遠くから見ていたレオンの方を向いた。

そして、30cmの針を3本取り出すとゆっくりとレオンの方に近づいていった。

「レオン逃げろ！！」

レオンは逃げようとしたが、センリはレオンに先ほどキキョウを攻撃したように針を投げつけた。

当然、最初の一撃をよけなかったようにレオンではよけることはできない。

しかし、レオンはその針は逆に掴むと逆にセンリにその針を投げつけた。

「！！」

レオンの投げ返した針はセンリの頬をかすった。

「まさか……」

一部始終を見ていたキキョウは一つの答えが脳裏をよぎった。

「シオン、か？」

「レオンも毎回毎回よく危険な目に合うものだ」

シオンは最近よく危険な目に合うレオンに対して、ため息をついた。

セリりは先ほどまでと違う雰囲気、冷や汗をかいている。

「あなたは……？」

「今回はお前か。しかも、今度はちゃんとした人間だ」

シオンは隠し持っていたナイフを取り出し、刃をむき出しにする。

「お前がレオンを殺そうとするなら、俺の敵だ」

セリりは針をシオンに向かって何本も投げつけながらシオンに向かって走り出した。

シオンはセンの投げつけた針をよけたりナイフではじいたりして当たらないようにしている。

センはシオンの近くまで来ると、太い針一本取り出しそれでシオンに向かって何回も突く。

そんなセンの攻撃をシオンはその攻撃をよける。

シオンはよけながらも反撃する隙を探していた。

「そこだっ！」

ガキンと金属音が響いた。

センの手にあつた太い針はなくなつた。

シオンがナイフでセンの太い針をはじいたのだ。

シオンはナイフの刃の向きをセンに向けてと続けてセんにナイフを振り下ろした。

その攻撃を読んでいたのかセンは振り下ろされる前にシオンと距離をあげる。

「危ないじゃないですか。私はあなたが方化け物と違うんですよ」

「お前は人間とは思えない動きをしているがな」

「お褒めいただきありがとうございます」

センリは笑顔を絶やさずにそう言うと、シオンに背を向けた。

「どこに行くんだ？」

「今日のところは帰ります。持ち合わせの針がなくなってしまいましたし」

「帰る」と言ったセンリだが、その足はいまだに動くことのできないキキヨウの方に足を向けた。

そして、キキヨウの腕を掴み無理やり体を抱くと、キキヨウに口づけをした。

「!？」

「!？」

口づけをされたキキヨウとそれを見ていたシオンは驚きのあまり言葉を失った。

キキヨウは抵抗しようにも、薬のせいで体が動かない。

キキヨウの喉が「ゴクリ」と何かを飲む音が聞こえた。

キキヨウが何かを呑むと、センはキキヨウを解放した。

「お前！何を飲ませた！？」

「痺れをとる薬ですよ。あなたが動けないのであれば私が飲ませるしかありませんからね。
しばらくすれば痺れは取れますよ」

センはそうキキヨウに告げると、帽子を脱いで頭を軽く下げるとその場を立ち去った。

「……」

「どうしたんだ？」

セリが立ち去ってからずっと黙っているキキヨウ。
そんなキキヨウが気になったのか、シオンが話しかけてきた。

「いや……別に……。それより帰るなら先に帰ってくれないか？あの男の言ったことが真実ならばしばらくすれば痺れは取れるだろう」

キキヨウは自分を置いていくように言ったが、そんなキキヨウの願いとは逆にシオンはキキヨウを横抱きにした。

シオンの行動にキキヨウは驚いた。

「どういっつもりだ？」

「お前に借りを作っておくのも悪くないと思ってな」

「……嫌な男だな」

「そこは親切と思って欲しいところだな」

体がうまく動かないから当たり前だが、キキヨウは文句を言いながらも黙ってシオンに抱えられていた。

屋敷の静かな夜

屋敷につくところにはキキヨウの痺れは取れていた。

センリが飲ませた薬のおかげだろう。

キキヨウを横抱きに使っていたシオンに、「痺れがとれたからおろせ」と言っただのでシオンはキキヨウをおろした。

「お前軽すぎ。ちゃんと食べてるのか？」

「不死者には食事は必要ない。何もしなくても死ぬことはないのだから……」

「ふうん」

キキヨウは屋敷の入口の扉を開ける。

屋敷内に入るとたまたま玄関付近にいた 그레이 がキキヨウの姿を見て驚いていた。

驚くのも当たり前である。

キキヨウの着ている白い生地ワンピースには血が付着しているし、傷もまだ塞がっていないから傷口から血は流れ出ていたのだから。

「キキヨウ、その血は？帰りが遅くなったことに関係しているんですか？」

「途中で悪魔払いに遭遇した」

「悪魔払いに！？大丈夫でしたか？」

「レオンなら大丈夫だ。シオンが守ったからな」

キキヨウは自分の後ろに立っているシオンを指差して言った。

しかし、グレイはそんなシオンには見向きもせず、キキヨウの両肩を強く掴んでキキヨウに言った。

「あなたの心配をしてるんですよ！どう見てもあなたの方が重傷です」

「私の心配は無用だ。私は不死者だから死ぬことはない。治癒能力はお前たちに比べれば弱いが、直に塞がる」

キキヨウはそう冷たく言い返すと、まだ塞がっていない傷口を抑えて血が出ないようにした。

そのまま自分の部屋に戻ろうと足を前に進ませようとしたが、いつまでも前に進むことはできなかった。

なぜなら、シオンがキキヨウの腕を掴んでいたからである。

キキヨウがシオンの手を振り払おうとしてもシオンはしっかりと掴んでいて振り払うことはできなかった。

「なにか用か？」

「せめて、傷口が塞がるまで包帯でも巻いてろ。血がでっぱなしだと床が汚れるだろ」

シオンがキキヨウの下を指差しながら言う。
実際に床はキキヨウの血で汚れていた。

「……分かった。傷口が塞がるまで包帯でも巻いておこう」

キキヨウが包帯を巻くことを承諾すると、シオンはキキヨウの手を放した。
自分の部屋に戻ろうとするキキヨウにシオンは「それから」と付け足した。

「ルリにやって貰えよ」

「自分で出来る」

「お前がやると仕上がりが適当になりそうだから、ルリにやって貰え。」

それとも、俺か 그레이 にやってもらうか？ ルインの奴にその血を舐

めてもらうつてのも有りだな」

傷口がある場所は胸。普通に考えれば男にやって貰うわけにはいかない。

「……分かったよ」

キキヨウはいやいやながらも了承したようだ。
グレイの話によるとルリは台所で夕食を作ってるようだ。

「血の匂いがするかと思えば、お前の血か」

キキヨウが台所に向かおうとした時、この屋敷の主人ルインの声が聞こえた。
いつの間にか階段を降りてきて玄関ホールにいたのだ。

グレイは主人であるルインに対して頭を下げ、その場を立ち去り自分の仕事に戻る。

ルインはキキヨウに近づくと、キキヨウが傷口を抑えている方の手を取る。

そして、キキヨウの手をそのまま自分の唇に近づけた。

キキヨウの手についた血を舐めたのだ。

「ん……」

手を舐められているキキヨウはくすぐったいようで、ピクツと指が動いた。

キキヨウの血を舐めるルインの舌を止まることはなかった。

ルインに血を舐められるのが嫌なキキヨウは手を引っ込めようと力を入れるが、キキヨウの手はビクともしない。

「（なんて力だ…。この男、それほど力を入れているようには見えないのに……！）」

キキヨウは自分の手を舐めているルインを睨みつけた。
彼女が今できる抵抗だろう。

「……人前でセクハラすんなよ」

その様子を横からずーっと見ていたシオンはあきれ顔で言った。

シオンにそう言われると、ルインは血を舐める舌を止めてその赤い目でシオンを見る。

「お前もどうだ？」

「いらねえよ」

「キキヨウの血は嫌いか？」

「ただ喉が渴いてないだけだ。それに必要なとき以外は吸血なんてしたくないしな」

ルインは「そうか」と言うと、再びキキヨウの手に残っている血を舐め始めた。

手にあつた血を全て舐めとると、ルインはキキヨウの手を放した。キキヨウはバツと強く手を引くと、その場を立ち去る前にまたルインを睨みつけてルリの元へと歩いていく。キキヨウがいなくなるとシオンは背伸びをする。

「さてと、そろそろレオンに軀を返すか」

「シオン」

「ん？」

シオンがレオンに軀を返そうとしたとき、ルインがシオンを呼び止めた。

ルインはシオンと真っ直ぐ向き合う。

「いつまでレオンにお前のことを隠しているつもりだ？」

レオンだけがシオンの存在に気付いていない。

他のみんなもレオンにはシオンのことは言っていない。

「俺は隠してるつもりはないぞ。レオンに言おうにも伝えられないからな」

シオンが言うには、レオンの時の記憶はシオンにはあるが、シオンの時の記憶はレオンにはないらしい。

いずれレオンにもシオンの時の記憶を持つようになるようだ。それがいつになるかは分からないようだ。

「ならば俺から伝えてもいいのか？」

「好きにしろよ。話はそれだけか？なら俺は寝る」

シオンは大きく欠伸をすると、レオンの部屋へと戻り制服姿のままベッドの上で眠りについた。

レオンが目を覚めたのはそれから5時間後のことだった。時計を見ると現在の時刻は午前0時。

あれ？俺は確か悪魔払いに襲われてたはずじゃ…？
その割には怪我がないけど…？

！？

「キキヨウは！？」

キキヨウは大怪我を負っていたはず！
キキヨウは大丈夫なのか？

ガバツとベットから起き上がると自分の部屋を出てキキヨウを捜す。

「どうしたんですか？何か慌てて捜しているようですが…？」

たまたま俺の部屋の近くにいた 그레이 が驚いた顔をして俺に話しかけてきた。

俺は 그레이 の肩をガツと掴んだ。

「キキヨウは！？キキヨウはどこにいるんだ！？」

「キキヨウさんならご自分のお部屋にいますけど、今は…ってレオ

ンさん！」

キキヨウ、無事でいてくれ！

俺は勢いよくキキヨウの部屋の扉を開けた。

「え？」

レオンは部屋の中を見て啞然。

キキヨウの部屋にはキキヨウは勿論いて、他にルリと知らない女がいる。

それだけなら問題ないのだが、キキヨウとルリが服を脱いで着替えをしているのだ。

ルリとキキヨウは最初のうちはレオン同様に啞然としていたが、すぐにキキヨウとルリは手にしていた服で自分の体を隠す。

ルリにいたっては表情がだんだんと怒り、部屋内にある本や時計などをレオンに投げてきた。

「ヘンタイ！のぞき！」

「うわっ！ちがつ！」

「あっち行きなさいよっ！」

レオンは慌てて物が当たらない所まで移動し、部屋から離れた。

「最後まで人の話を聞かないからそうなるんですよ」

いつの間にか 그레이がレオンの横に立っていた。

「そういえばさつき知らない人がいたけど…。それにあいつら何やってたんだ？なんか服がいっぱい散らばってたし」

「あの女性はルイン様専属のデザイナーです。今回はキキヨウさんとついでにルリの服を見繕いに魔界から呼んだんですよ」

「キキヨウの服を？」

「キキヨウさん、まともに服を持っていないらしいので…」

「ああ…」

キキヨウと初めて出会ったときに着ていたあの汚れてボロボロの男物の着物。

おそらくは他に着るものがなくて、何度も着ていたのだろう。

「レオンさん、今は暇ですか？」

「え？まあ……」

「でしたら、ルイン様の部屋まで運んで欲しいものがあるんです」

「？」

グレイに頼まれ、運んで欲しい物を取りに、居間まで取りに行く。
運ぶ物は体と同じくらいの大きさの白い箱だった。

見た目通りにその箱は重く、運ぶのは大変だったけどなんとかルイン様の部屋まで運ぶことができた。

グレイは箱をルイン様の部屋のソファの前にあるテーブルの上に置いたから俺も同じようにテーブルの上に置いた。

「……なんだこれは？」

「魔界にいるルイン様の兄君、シェイド様から送られたお見合い写真です」

ルイン様って兄がいるんだ…って、見合い！？

ルイン様、千年以上生きてるのに未だに未婚者だったのか…。

いや、屋敷に奥さんがいないから分かってたけど…。

「兄上から？」

「シェイド様から『いい加減にお前も婚活したらどうだ？』とのことですよ」

「兄上だって未婚者だろ」

「シェイド様曰わく、『一人の女性に縛られるのは俺の主義じゃない』だそうです」

「兄上らしいな」

ルイン様はため息をつきながらも笑っていた。

ルイン様は仕事机から立ち上がると、箱を開けてお見合い写真を見始めた。

魔界の女の人ってどんなんだろう？

「興味があるならレオンも見えていいぞ」

俺が見合い写真をジーンと見ていたのに気がついてたようでルイン様が見ていいと許可をくれた。

さっそく手にとって見合い写真をみる。

……なんてゆーか魔界の奴らただけあつて体が動物っぽかったり、目が3つ以上あったり人型じゃないのが多いな。

あ、この女は人型だ。

けっこう可愛い顔してるし。

「グレイ、こいつは誰なんだ？」

「この方はスノー族のセルシウス伯爵の1人娘の“フェリス”セルシウス”様です」

「スノー族？」

「氷や雪を自在に操ることのできる種族です。

日本風に言い換えますと雪男や雪女といった類ですね」

なるほど……。

「フェリス様といえば、先ほど魔界からお手紙が届いたのですが……セルシウス伯爵の屋敷で明後日、パーティがあるそうです」

「セルシウス伯爵の屋敷で……。やはりフェリもいるのか？」

「当然です。フェリス様もセルシウス家の者ですから」

ルイン様の顔が真っ青だ！

あんな顔のルイン様、見たことない…。

「出席しない、というのは出来ないのか？」

「ダメです。パーティ内容は、セルシウス伯爵のご子息の婚約パーティですから」

「ハア……」

ルイン様がため息をついて下を向いた。

そんなにパーティに出たくないんだろうか？

それともフェリスさんに会いたくないんだろうか？

「ルイン様、そんなにパーティに出たくないんですか？」

俺が質問すると、ルイン様は真っ青な顔を俺に向けて答える。

「社交が面倒だし、なによりフェリがいる。フェリは思い込みが激しい性格なんだが…」

「思い込みが激しい？」

「あれは三百年前だったか？」

俺が魔界でたまたま親しくなった女と話していたら偶然それをフェリが目撃してな、フェリは俺とその女が付き合ってると思い込んだらしくその女を氷づけにしたんだよ」

確かに少し思い込みがあるけど…。

親しげに話してればそう思い込むのも無理ないよなあ。

「四百年前なんか、魔界の屋敷にいた時、すれ違ったメイドに探していた物の在処を聞いただけで、そのメイドを氷づけにしたこともあった」

それはちよつと思ひ込みすぎかも…。

「ルリも標的にされたこともあったな」

ルリも？

「フェリス様はルイン様を愛していますからね」

ルイン様はフェリス様に愛されてるのかあ…。

「迷惑この上ないな」

またルイン様がため息ついた。
今のため息は今までで一番大きいかも…。

「とにかく、婚約のことを少しは考えてくださいね」

グレイはルイン様一礼すると背を向けてルイン様の寝室を出ようとする。

俺もグレイのあとを追うように部屋を出ようとしたけど…。

「レオンは待て」

とルイン様呼び止められた。

グレイが部屋を出て行くと、ルイン様が俺を真っ直ぐに見た。

何の用なんだろう？

「お前、最近一部の記憶がないだろう？」

「え！？どうしてそれを…」

俺、誰かに言っただけ？

でもルイン様、鋭そうだし俺の言動から分かったんだろうなあ。

「お前が最近記憶がない理由を俺は知っている」

「え？」

服の新調が終わったキキヨウとルリはメイド服に着替えて部屋を出た。

ご機嫌なルリとは反対にキキヨウは疲れている様子だった。

疲れているキキヨウに気がついたルリは話しかける。

「どうしたの？元氣ないわね」

「お前は元氣だな」

「当たり前よ。新しい服が着れるのよ。オシャレの幅が広がるじゃない」

「服など一着あればいいだろ」

「あんたねえ、女なんだから少しは身なりに気を使いなさ……」

バンッ

突然、ルリの言葉を遮って強く扉を開ける音が響いた。

扉の音はルインの寝室からだった。

ルインの寝室を勢いよく出たのはレオンだ。

レオンは目を赤くして屋敷を勢いよく飛び出した。

「なに？ 一体どうしたのよ？」

「…シオンがいるから大丈夫だとは思うが、一応行ってくる」

キキヨウはルリにそう告げるとレオンのあとを追いつき、屋敷を出て行った。

キキヨウが屋敷を出たあとでルインが寝室から出てきた。

騒ぎを聞きつけたグレイとレオンの状態を見ていたルリがルインに話を聞くため、ルインに近寄った。

「ご主人様、一体どうしたんですか？ レオンの様子からただ事じゃ

ないですよね？」

「レオンにシオンのことを話した。それとシオンがキキヨウの血を吸ったこともな」

「レオンさんに……。突然言われて気持ちの整理が出来ないのでしょ
うね……」

「レオンはどうした？」

「屋敷を出て行きました。キキヨウがあとを追ったから万が一襲わ
れて大丈夫だとは思いますが。シオンもいるわけですし」

屋敷を飛び出したレオンを捜しているキキヨウ。

キキヨウは屋敷からはそれ程離れていない場所を捜していた。

「確かこっちの方に……」

キキヨウがキヨロキヨロと首を動かしていると、人影が目に残った。

その人影は勿論、レオンだった。

キキヨウはレオンに歩いて近づき、声をかけた。

「ここにいたのか」

「キキヨウ…」

声をかけられて初めてレオンはキキヨウの存在に気がついた。

「屋敷が近いとはいえ、夜に外に出るのは危険だ。
魔族に襲わるぞ」

「ごめん…」

レオンの声からは張りが無い。

キキヨウがレオンの顔を覗くと、レオンの表情は暗く、更に目が赤かった。

「（泣いていたのか？）」

「ごめん」

突然、レオンがキキヨウに対し謝罪をした。
なぜ、自分が謝られているのかまったくキキヨウは理解が出来ない。

「その謝罪はなんだ？」

「俺、キキヨウの血を吸っただろ。その謝罪だよ」

レオンはシオンの時のことを話している。

「それはお前ではなくシオンだ。それに私は不死者だから死ぬこともない。お前が謝る必要はないはずだ」

「でも、シオンも俺だから…」

「そんなに自分の中に別の奴がいたのが嫌なのか？」

「俺は嫌だな。知らない奴が俺の中にいて、意識がない間に俺の体で好き勝手やってるんだから」

レオンはキキヨウに「嫌か？」と聞かれ、自分の素直な答えを言った。

「お前がシオンを拒むのは勝手だが、シオンには礼を言うべきだと思うがな」

キキヨウの言ったことを不思議に思ったレオンは今まで下を向けていた顔を上げ、キキヨウを見た。

「礼を言う？どうして？」

「シオンはお前の命を助けたからだ」

「え？」

「考えてみる。お前が意識を失う時はお前の身に危険が生じたときが殆どではないか？」

「……………」

レオンは意識を失うまえの記憶を掘り起こした。

……………キキヨウの言う通り、考えてみれば俺が意識を失う時は決まって俺が危険なときだ。

狼男に襲われたときも、キキヨウに襲われたときも、悪魔払いに襲われたときも意識は失ったけど、こうして生きてる。

「でも、どうして俺の中に……………？」

「シオンはルインを殺すために軀が必要だったと言っていた」

「だからって何で俺なんだ？」

「詳しくは知らないが多分、軀にするには何か条件があるのだろう」

「条件ってどんな条件なんだ？」

「私は知らないが、シオンがもしかしたらルインが知っているんじゃないか？」

キキヨウがそう言った直後、座り込んでいるレオンに手を差し伸べる。

「いつまでもここにいても事実是不変ならない。とりあえず屋敷に戻るぞ」

キキヨウの手を取り、レオンは立ち上がる。

レオンが立ち上がったのを確認するとキキヨウは背を向け、屋敷の方へ足を進めた。

「キキヨウ、ありがとうな」

レオンに突然、礼を言われたキキヨウは足を止めて顔だけレオンの方向を向いた。

「なぜ礼を言う?」

「キキヨウと話してたらスッキリしたから…。話を聞いてくれたお礼だよ」

「そう…」

二人は月明かりの下、屋敷へと戻っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2812t/>

赤い月夜の館

2011年10月4日14時55分発行